



私の『おくのほそ道』

河野 通浩

秋田大学大学院医学系研究科皮膚科学・形成外科学講座教授

私は、これまで遺伝性疾患を専門の1つとして臨床と研究を行ってきた。最初からそう考えていたわけではない。秋田での学生生活は(都合よく解釈すると)本当にのんびりとさせていただいた。秋田県の南端、山形県との県境に近い象潟町にある増満寺に行ったときに、奥の細道という割には松尾芭蕉はここでもう引き返していたと知って、自分は奥の奥にいたのだなあ、と思った。そして、それもいいもんだと思った。卒後は前年秋に着任された富田靖教授のもとで初めての入局者になった。2年目から大学院に入り、遺伝性対側性色素異常症の遺伝子同定の研究を立ち上げるようになった。患者さんの家系内からできるだけ多く方の採血をすることが必要で、スマホどころかインターネット自体まだまだ普及していない時代に、電話で趣旨を説明し、都合のよい日時をうかがって、まだカーナビもなかったので、地図を片手にお宅にうかがった。初対面の患者さんのご親戚、留守だったりすると繰り返し電話をするのもおっくうになってくるのだが、いつもは優しい富田先生から「どんどん電話かけて、どんどん行くんだよ」とはっぱをかけられて、電話をかけた。そのうち芋づる式に家系図はどんどん伸びて、北海道から鹿児島まで100人ほどの患者さんやそのご家族の手足をみて採血させていただいた。私の大学院での研究は、人に会ってお話を聞くことが半分以上だったような気がする。富田先生の異動について行った私は愛知医科大学、名古屋大学で研究

を続けさせていただいたが、留学はまったくこれまでと違って皮膚病理を学ぶ機会をいただいた。帰国後はたくさんの先生からご紹介・ご依頼いただいて、遺伝性疾患の遺伝子診断をさせていただいた。名古屋という地の利もあって東京からも大阪からも患者さんが直接来てくれて、実際に診察ができたのでありがたかった。

富田先生が退官され、秋山真志先生が北海道大学から着任された。秋山教授は魚鱗癬をはじめとする遺伝性角化症の研究を推し進めていらしたので、本当にこれはありがたかった。これまで対象疾患は色素異常症であり、あまり経験のなかった角化症の患者さんもとくさん経験させていただいた。秋山先生の仕事のスピードに追いつくのに精一杯だった。

振り返ると、目の前の仕事を夢中でやってきたように思う。そうしているうち、まったく思いがけず、奥の細道の終着地(は名古屋から電車で40分ほどの岐阜県大垣市)の近くで長く過ごし、(芭蕉は行っていない)海外で生活することになった。もちろん、私が夢中でやっただけではなく、師の導きがあったからに違いない。

現在はさまざまな情報が圧倒的な量で得られるようになっているぶん、私の若いころに比べるといろいろ考えることも多いだろう。しかし、目の前の仕事を一生懸命やることは無駄にはならないと思う。奥の細道の奥で、若い先生たちと頑張ってみた。